

アートは一部の専門家のものであってはならないのです。多くの人に見てもらって、わかってもらいたいからこそ、そういった公共的な場所でも作品をつくります。

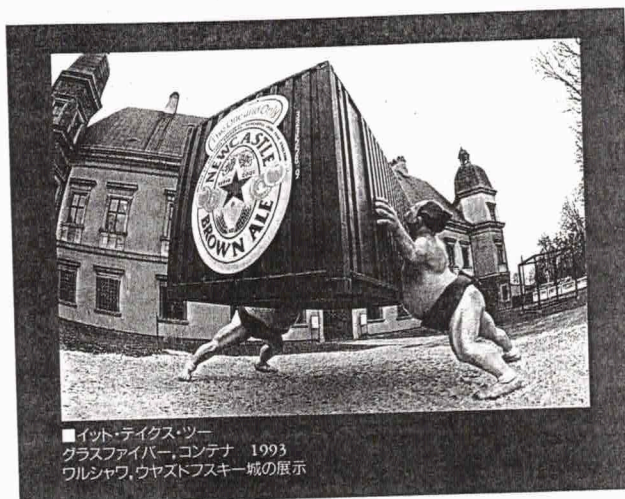
——今後の予定は？

マック この後すぐスコットランドに帰って作品をつくって、その後ミラノのギャラリーで個展を開きます。ミラノは、ファッションの先端をいく町ですし、『ドムス』などさきほど話したデザイナー・リビング的な雑誌もあるし、そういった環境のなかで作品をつくるという意味でも興味深いですね。

作品完成後、ただちに彼はスコットランドへ向かった。

ところで、この展覧会を企画したのは彫刻の森美術館のキュレーター、山崎優子さんである。近年キュレーター志望の人が多く、その参考になるかもしれないので、彼女のキュレーターへの道を紹介しておこう。25歳で舞台照明の勉強をするためにニューヨークへ渡り、大学に入ったが途中で美術に専攻を変えた。そのきっかけになったのは「MoMAでピカソの『アヴィニョンの娘』を見て、どうしてこんな絵がここにあるんだろうと思ったんです。それを知りたいという好奇心と、ニューヨークには画廊や美術館がたくさんあるという環境的なことがいっしょになって……」。4年間の大学での授業のほか、MoMAの教育部門が行っているサマー・インターンシップというプログラムをとり、美術館とは実際にどういうことをするところなのかを体験、いろいろな部門に配属され、実務を行なうことで、自分の適性が自ずからわかっていくというシステムだ。そして帰国。アメリカでの経験をいかすべくキュレーターを志望した彼女は、美術館に直接出向いて、職がないかと訪ね歩いた。この積極性には感服する。「公立の場合は公務員の資格が必要であるといった、日本の美術館のシステムを全然知らなかったものだから……」。そして何番目かに、上野の森美術館に電話を入れたところ、彫刻の森美術館の東京事務所で英語のできる人を探しているということで紹介してもらい、海外との通信や来日作家の付き添いなどの仕事をこなすこととなる。そして美術館に入って3年目、彼女にとって初めての企画展が実現した。それが今回のデイヴィッド・マック展である。「ニューヨークにいたときに、ブルックリン美術館でマックの今回のような雑誌の作品を見てとてもショックを受けて、そのときの感動がずっと頭のなかにあっただけです。日頃、作品の制作過程や作家の仕事ぶりを知らない来館者の皆さんにも見ていただける良い機会にもなると思います」。今回は、美術館のスタッフにとっても直接制作に参加したり、現場を見ることができて、とてもいい刺激になったそうだ。「これからも、こういったかたちで企画展ができればいいと思っています」。

[構成=C. I.]



■イット・テイクス・ツォー  
グラスファイバー、コンテナ 1993  
ワルシャワ、ウヤストフスキー城の展示



■マガジン・インスタレーション  
ワイアファミリーニ・ギャラリーの展示 1993



■マックとキュレーターの山崎さん

THE HAKONE OPEN-AIR MUSEUM

MIKI YODA  
ASSISTANT CURATOR

MUSEUM: NINOTAIRA, HAKONE-MACHI, KANAGAWA-KEN 250-04, JAPAN  
TEL.0460-2-1161 FAX.0460-2-4586  
TOKYO OFFICE: C/O SANKEI BLDG, 1-7-2 OHTEMACHI, CHIYODA-KU, TOKYO,  
100 JAPAN. TEL.03-3245-1546 FAX.03-3245-1547  
THE UTSUKUSHI-GA-HARA OPEN-AIR MUSEUM  
MUSEUM: UTSUKUSHI-GA-HARA DAIJO, TAKESHI-MURA, CHIISAGATA-GUN,  
NAGANO-KEN. 386-05 JAPAN, TEL.0268-86-2331 FAX.0268-86-2217







デイヴィッド・マック DAVID MACH  
マガジン インスタレーション展 Magazine Installation

Here to Stay (ヒア・トゥ・ステイ) 制作/1990年 会場/グラスゴー、ザ・トラムウェイ 素材/雑誌、新聞紙

